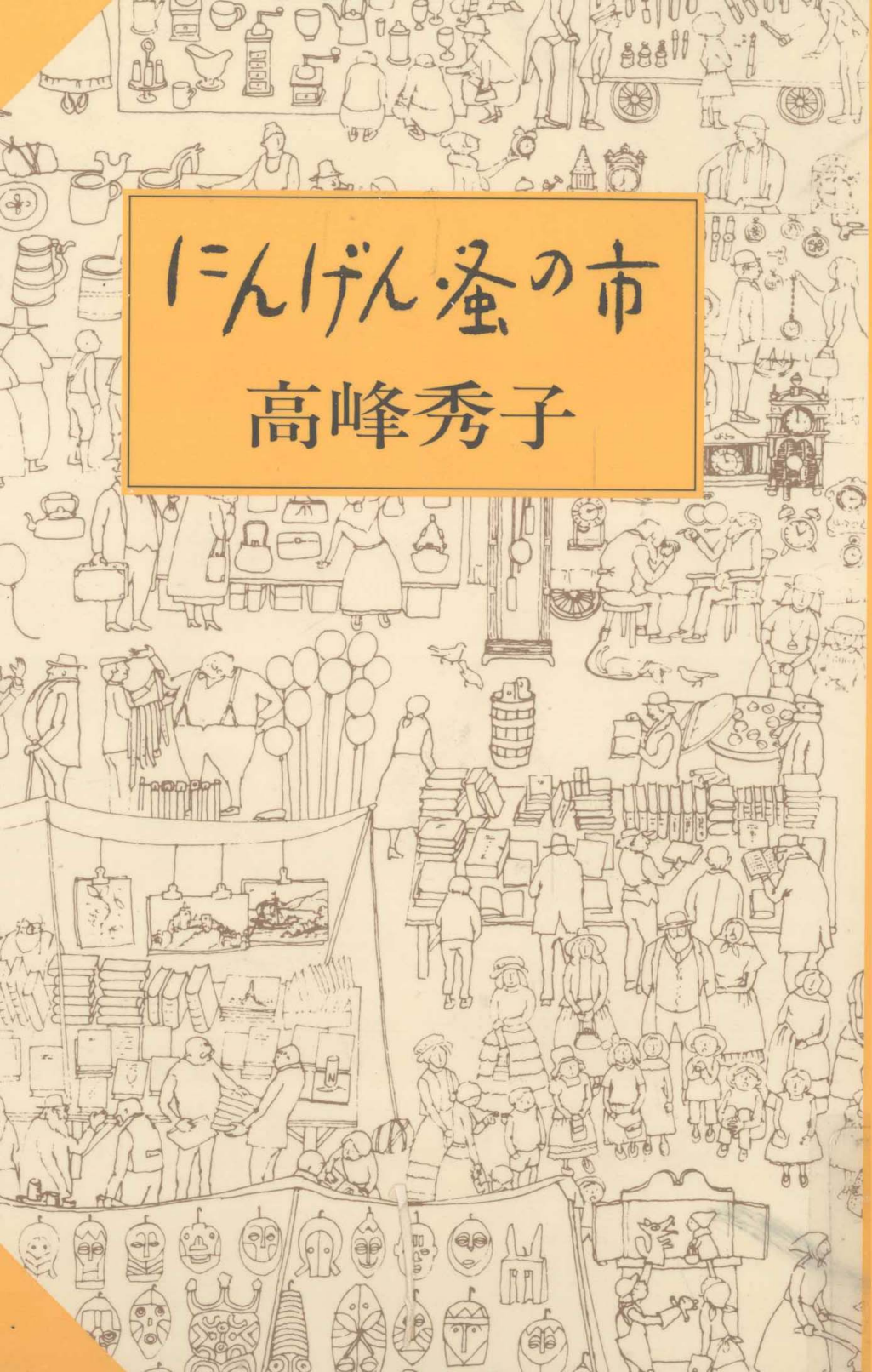
にんげん蚤の市

高峰秀子



にんげん蚤の市

高峰秀子

江苏工业学院图书馆
藏书章

にんげん蚤の市

平成九年一月十五日　第一刷

著者　高峰秀子

発行者　新井信

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表(〇三)三二六五―一二一一

印刷所　凸版印刷

製本所　加藤製本

定価はカバーに表示してあります。
落丁乱丁の場合は小社営業部にて送料当社負担でお取替え致します。

© Hideko Takamine 1997　Printed in Japan

ISBN4-16-352580-7

目次

ホノルルの静かでない生活　7
のっぺらぼう　30
デコちゃんレター　42
眉間の縦じわ　60
小さな棘　78
人間鑑定図　95

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

年金花火　121
ホノルル便り　172
勲章の重さ　189
菜の花　211

装幀・題字　安野光雅
装画・本文カット　安野光雅『蚤の市』（童話屋）より

にんげん蚤の市

ホノルルの静かでない生活

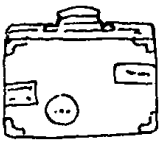
東京のゴタクサとした日常を振り切るようにして、今回もナリタ発午後十時、ＪＡＬの72便に乗りこんだ。

搭乗口のドアがパタン！　と閉まり、おなかに何百人という人間をつめこんだジャンボ機が、ノロノロと滑走路に向かってしまえば、あとは六時間前後でハワイはホノルル空港に着陸する。

移民局のチェックをうけ、カートに荷物を載せて、一歩屋外に出れば、目の前に抜けるようなコバルトブルーの空が広がり、爽やかな風がこころよい。「あぁ、この空、こ

の風、これだからハワイ通いはやめられない。ボカぁ、しあわせだなァ」。思わずニンマリとして夫・ドッコイを振りむけば、彼もまんざらでもない表情でポッカリ浮いた白い雲に目を細めている。

カミナリパーマにスニーカー、太めの腰にファニーポーチときめこんだ観光オバサンの一団をすりぬけて、タクシーに乗る。タクシーは紺碧の海を右に見ながらハイウエイにのってスピードをあげる。ホノルルはハワイ語で〝人の集るところ〟という意味だそうだが、東京の交通地獄をおもえばホノルルは交通極楽、ラッシュ・アワー以外の時間ならスイスイという感じで目的地に着く。このままワイキキまでつっ走って、上等ホテルのスイートにでも入り、バタンとベッドにひっくりかえればそれこそ天国だけどネ、とおもう間もなく、タクシーはアラモアナ・パークの角をひょいと左折して、三十二階建てのアパートの玄関前にすべりこんだ。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私たち夫婦が二十年の余、毎年、冬と夏に通い続けているホノルルの巣は、このアパートの四階にある。寝室、リビングキッチン、バスルームのみという簡単な間取りだが、三方がラナイ（ヴェランダ）だから風通しはバツグン。

三階は大小のプールの周りが散歩道になっていて手入れのゆきとどいた芝生が美しく、わが家の庭の如く格好な借景となって、アパート特有の圧迫感がないのがなによりもありがたい。このアパートであらゆる雑念をタンマして、ＴＶも見ず新聞も読まず、ひたすら、金魚のごとくパクパクとオゾンを吸いこみ、心静かな生活を過したおかげで、今日までいのち長らえることができたのだ、と、私は信じている。

アパートの管理人から借りたカートにスーツケースを載せ、エレベーターで四階へ。エレベーターの内張りが、いまは稀少価値となっている重厚な「コアの木」なのが、このアパートの御自慢である。

ドアを開け放って、カートを運び入れたそのとたんに、持病の発作が起きた。といっても私の持病は、フツーの人よりかなり重度の清潔病、または潔癖症とでもいおうか、たぶん死ぬまで全治はしないだろうと、自分でも諦めている奇病である。家中を駆けまわって、ガラス戸を一杯に開けて風を入れ、その足で台所へ突進して、まず皿洗い機の

扉を開ける。今夕の食事に清潔ピカピカの食器を使うために、半年間戸棚の中で眠っていたありったけの皿小鉢からコップ類、フライパンから鍋に至るまで、とことん洗いあげてしまうのが、もう習慣になっている。

私は夫・ドッコイから鍋女といわれるほど鍋が好きだから、鍋だけでも大きいの小さいの、深いの浅いのと二十個を越える。もちろん一回の洗浄では入りきれないから皿洗い機が満杯になったところで、洗剤を入れてパチン！　とスイッチを押す。シューと水音がして、ゴットントン、ゴットントンと皿洗い機が作動しはじめた。「よし。愛い奴じゃ」

次ぎは皿洗い機の反対側にある冷蔵庫の扉を開けて、これも半年間眠っていた製氷機の古氷をシンクに捨てる。ついでに夕食に必要な料理の材料をメモるのを忘れてはならない。一休みしたら、カートを引っぱった夫とマーケットへ買出しにゆくからだ。

「オーイ、お前さんもシャワーを浴びなさいよ、いい気持ちだよ」と、バスルームから夫の声。

私は「ハイハイ」と、返事はするけど、こちらはシャワーどころのさわぎではなく、台所中を雑巾がけの真最中だ。「人間、埃じゃ死なない」なんてうそぶく人もいるけれ

ど、私は、人間は埃で死ぬとおもっている。少なくとも超癇性な私は、身動きすればフワーッと埃が舞いあがるような不潔な部屋に閉じこめられたら、なめくじの如く這いまわって悶死してしまうだろう。

「もと映画女優、高峰秀子。過度の潔癖症のため埃で悶死。原因は、埃よけにと頭からかぶったビニール袋で窒息死か？　と、医師は語る」

なーんて、新聞の死亡欄に出るかも。

ふた坪ほどの小さな台所ではあるけれど、それでも掃除はたいへんだ。レンジ、調理台、シンクの周り、食堂との境のカウンターと拭きすすみ、ヨイショ！　としゃがんで床の雑巾がけをしている途中でフッと手がとまった。珍しく息ぎれがして心臓がパカパカしている。一瞬「え？」と思ったが、なにビックリすることはない。出発前の日本国のあわただしさに加えて、機内ではほとんど眠れなかったし、時差ボケのせいもある。ホノルル時間はいま午前十一時だが、自分の身体はまだ午前五時という日本時間をひきずっている。私は常日頃、なんでも「トシのせい」にするのは老人の甘ったれだとケイベツしている。が、私もいつの間にか七十一歳というまぎれもない老人になっていて、たかが台所の雑巾がけ程度でも、身体のほうからこうして心臓パカパカと信号がくる。

せめてホノルルにいる間くらい静かな生活に徹したらどうですか？　というメッセージなのだ。「さようです。もう無理はきかない」。私は納得して雑巾を放り投げ、熱いシャワーでも浴びよう、と、シズシズとバスルームに入った。

三、四回、ぶっ続けにフル回転をさせたせいか、皿洗い機の機嫌が悪い。

フライパンや鍋を呑みこんだまま、何度スイッチを入れなおしてもグーともスーともいわずにむっつりと押し黙っている。数ある台所用品の中でも、使用ずみの食器を清潔に洗いあげてくれる皿洗い機は、私にとって、なくてはならぬ台所親衛隊の大隊長だ。いくら機械だからといって無責任ではないか！　私はカッとなって、夫を呼んだ。

「皿洗い機がヘソ曲げた」

「お前さんがあんまりコキ使うからだろ」

「動くべき機械が動かないなんて、許せない！」

「そういうのを故障というのです」

夫は道具箱を持ち出してきて皿洗い機の前にどっかりと坐りこみ、機械の上に並んだ幾つかのダイヤルを押したり引いたり叩いたりするがラチがあかない。扉をあけてみても、中には洗剤を入れる窪みがあるだけで、原因を確かめる糸口もない。三十分ほどもダイヤルをひねくりまわした後、ようやくモーター音がしたけれど、かんじんのシューという水音が聞こえない。ギヴ・アップだ。

「この皿洗い機、何年使ってるかな」

「十……五年になるかも」

「ガタがくるのも無理はないね……新しいの、買うか」

「へッ？」

そうです、そうこなくちゃいけません。私の三角マナコが急に夢みる夢子さんのごとくにトロトロにほどけだし、私は急いで皿洗い機のメージャーをとり、夫は銀行の小切手帳を持って、アパートのすじ向いのデパートメントストア「シアーズ」へと駆けだした。

十五年もたてば、皿洗い機のデザインもぐっと変って、あれか、これかと目移りのあ

げく、私が選んだのはシンプルなデザインで色は純白。ついでにチョロリと純白のトップクッカー（電気レンジ）も買うことに決めた。夫は、とみれば、洗濯機と乾燥機がズラリと並んだコーナーをウロウロと歩きまわっている。

台所は私のテリトリーだが、バスルームの掃除と洗濯は夫・ドッコイの領分だ。そういえば、さっきも「洗濯機の水はけがよくないなァ……」と、一人ごとを言っていたっけ。

「ねえ、ねえ、このさいどうですか、洗濯機と乾燥機も新しくしたら？」

「うーん、そうだネ、そうするか」

今度は夫の眼が夢みる夢男さんになった。皿洗い機を買いにきたつもりが、プラス、電気レンジ、洗濯機、乾燥機、と思いがけぬ大出費である。品物はそれほど高額ではないが、配達料、取りつけ工事費、古物の撤去料、三年間の保険料、と加算されて、金額はどんどん嵩んでゆく。セールスマンは大ニコニコである。夫が小切手帳を広げたところへ、「ちょい待ち！」という感じで年配の売り場支配人が現れた。

「この洗濯機は、明日から一〇パーセントのセールになります。小切手の日附けを明日にしては如何ですか？　そのほうがおトクですよ」

こちらのセールスマンは、日本のそれとはずいぶんと異なる。店への忠誠心より、常

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com